オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践」の意義と課題

―「道徳教育動画アーカイブ」を活用したオンラインセミナーを起点として ―

畿央大学　島　恒生

キーワード：道徳科、授業づくり、授業実践

1. 授業づくりや授業実践の取組

（1）オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践」

日本道徳教育方法学会が取り組む「道徳教育方法に関する理論と実践両面からの総合的な研究－オンラインセミナー形式による多面的・多角的な視点からの検討を通して－」に関して、企画委員会と研究委員会では、本学会の学会設立 25 周年事業として取り組んだ「道徳教育動画アーカイブ」（以下、学会 DVD）を活用し、2021 年 9 月 5 日（日）に第 1 回オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践」を、2022 年 8 月 28 日（日）に第 4 回オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践 Part2」を開催した。

今回は、その報告者の中から、2本の論文を寄稿していただいた。

本稿では、まず、本学会における道徳科に関する最近の研究や実践の傾向について概観した後、2本の論文のそれぞれの意義について述べるとともに、オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践」の意義と課題について言及したい。

（2）本学会における道徳科に関する最近の研究や実践の傾向

ここ 3 年間、新型コロナウィルスの感染拡大により、本学会の研究発表大会は、大会資料集の発行やオンライン開催など、非対面の形となった。そのような状況においても、研究や実践は確実に進められてきた。では、道徳科に関わって、どのような研究や実践が行われてきたのだろうか。本稿では、コロナ前の 2019 年第 25 回大会から最近の 2022 年第 28 回大会の 4 つの研究発表大会にエントリーした自由課題研究発表に注目した。その数は、全部で 78 本。その中から、道徳科に関する内容に絞り分類したものが、次の通りである。

なお、当然、研究によって複数の内容にまたがるものもあるが、ここでは、それぞれの自由課題研究発表を 1 つの主たる内容に分類している。

表　2019 年～2022 年の本学会研究発表大会にエントリーした自由課題研究発表の内容

主たる内容	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年
道徳科授業の原理や歴史、授業論に関する研究	4	1	1	2
道徳の内容項目に関する研究	2	2		
道徳教材の分析や活用に関する研究	1	2	3	1
偉人や郷土愛の指導に関する研究			3	2
いじめの問題や LGBT、がん教育、国際理解など現代的課題を扱った道徳科授業に関する研究		4	2	2
道徳科授業の指導過程に関する研究	1		1	
補助発問、切り返しの発問などに関する研究	1	2		
書く活動や話合い活動に関する研究		1	1	1
振り返りや自己評価に関する研究	4	2	1	1

評価に関する研究		1		
深い学びに関する研究		2		
道徳的行為に関する体験的な学習に関する研究	1			1
問題解決的な学習に関する研究		2		
道徳科授業と学級づくり、教師の関わりなどに関する研究	1	1	2	1
シティズンシップ教育に関する研究			1	1
哲学的対話に関する研究		1	1	
ICT の活用に関する研究		2	1	
OECD の Education2030 や資質･能力に関する研究		1	1	3
教員の指導力向上や授業研究、学校体制などに関する研究	2	1		2
道徳科と家庭、地域との連携に関する研究	1			
計	18	25	18	17

これらを概観すると、幅広く取り組まれていることが分かる。また、最近は、偉人や郷土愛の指導に関する研究や、いじめの問題や LGBT、がん教育、国際理解など現代的課題を扱った道徳科に関する研究、シティズンシップ教育に関する研究など、特定の内容に関わる研究が増えている傾向が感じられる。さらに、OECD の Education2030 や資質・能力に関する研究が増えつつあることも分かる。

教科化から小学校・小学部で 5 年、中学校・中学部で 4 年が経過する中、実質的な深い学びのある道徳科授業の実現が、より一層求められているのではないだろうか。また、いずれの研究や実践においても、子どもの主体的な学びが重視され、学習者である子どもの視点に立った授業づくりが目指されていることも分かった。「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点が浸透しつつ、その実現に向けて道徳科の授業づくりが進められていることや、道徳科の目標と資質･能力との関係､ファシリテーターとしての教師の役割が注目されていると言える。

2. ２本の論文について

(1) 論文「道徳科授業の深い学びの実現」について

本論文の起点となったのは、学会 DVD の「道徳教育動画アーカイブ Vol.①」の小学校の授業動画①である。

平成 26 年 10 月 21 日付け中教審答申「道徳に係る教育課程の改善について」においても指摘されている「望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業」や「読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導」を克服するためにも、発問を工夫することは非常に重要である。

本論文では、授業を組み立てるための「進行役」や「つなぎ役」を果たす発問と、考えを深めるための「引き立て役」となる発問が授業の中には存在し、特に後者が深い学びの鍵となることが述べられている。

確かに、筆者自身、普段、授業を参観していると、教師が予め用意していた基本発問や中心発問、さらには補助発問を予定通りに順に投げ掛け、子どもたちは教師からの発問を待って答えている授業や､明らかに不自然な流れで補助発問が出てくる授業に出会うことが少なくない。

その一方で、子どもたちの考えをうまく引き出し、子どもたちの中に議論の輪を作り、深い

学びを実現している授業に出会うこともある。考え合う集団が成立し、ときには、教師のねらいや想定を軽々と越えていく授業である。このような授業は、教師がぐいぐいと引っ張っていく指導では叶わない。かといって、黙って見守っているだけでも実現しない。ここに、教師のファシリテーターとしての役割や授業構想があり、その中で、補助発問には大きな役割がある。

本論文では、補助発問を丁寧に分類し、特に、考えを深めるための「問い返し」と「ゆさぶり」の分類や、予め設定しておく補助発問と子どもの発言から臨機応変に出す補助発問の両方があること、これらの補助発問が深い学びにつながること、そして、これらの補助発問を子どもたちに発することが可能になるためには授業のねらいが明確である必要があることなどが、具体的な授業事例で示されている。

（2）論文「子供の問題意識を大切にした道徳科授業の取組と課題」について

本論文も、学会 DVD 所収の小学校の授業動画③、④を起点とするものである。テーマは、子どもの問題意識や学習のめあてづくりなど、最近、注目されている内容である。

本論文でも述べられているように、学習指導要領においても、「道徳性を養うことの意義について、児童自らが考え、理解し、主体的に学習に取り組むことができるようにすること。」など、子どもたちの主体的な学習の大切さが求められている。本論文は、「子供たちが問題意識をもてるようにするとともに、それを起点として授業を構想し、子供たちが主体的に追求したり、必然性のある問いを生み出したりしていけるような授業」の実現に向けての実践的な内容である。

これまでの授業は、教師がぐいぐいと引っ張っていく指導になりがちで、子どもたちにとっては受け身の授業となる傾向があったのではないだろうか。さらに、学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が求められたことも相まって、学習者である子どもが自分の学習の意味や意義、また、学習の過程をしっかりと意識し、学びを深めていくことが、重視されている。そのことからも、本論文が取り上げた、子どもが問題意識をもって学習に臨むことは、非常に意義深いことである。

なお、本実践では、導入での工夫だけでなく、展開場面での教師の「問い返し」や終末での振り返りの「鳥の目タイム」、そして何より、学習のめあてを考え深めていく「視点」の明確化が、相乗効果をもたらしていることも忘れてはならない。

3. オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践」の意義と課題

本学会の企画委員会と研究委員会で取り組んできたオンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践」では、具体的な授業実践を取り上げ、道徳科授業の工夫について議論してきた。『令和 3 年度道徳教育実施状況調査 報告書』においても、過半数の学校が「議論して考えを深める」、「多面的、多角的に考える」ための指導や「教材の吟味や授業構想のための時間の確保」に課題を感じていることが報告されている。具体的な授業実践をその考え方や理論も合わせて交流し議論することや機関誌で発信することは、これらの課題の解決や道徳科の深化、発展に大いに意義深いことである。今後は、指導方法の工夫だけでなく、道徳の内容や教材の分析に関わる実践的な取組を取り上げることも課題としたい。

注

1）中央教育審議会『道徳に係る教育課程の改善について（答申）』2014（平 26）年 10 月
2）文部科学省『小学校学習指導要領』2017（平 29）年 3 月
3）文部科学省『令和 3 年度道徳教育実施状況調査 報告書』2022（令 4）年 3 月